

愛知大学人文社会学研究所 開設記念シンポジウム

人文知 の再生に向けて

日時 2015年
6月27日 (土)
10:00～16:30

入場無料
来聴歓迎

場所 **愛知大学豊橋校舎**
研究館1階 第1・2会議室
豊橋鉄道渥美線「愛知大学前」下車

※ご来場の方は公共交通機関をご利用ください。

プログラム

10:00-10:15	問題提起	伊東利勝(歴史学)
10:15-10:50	「存在」観の変遷について—西洋的知の根源と大学—	下野正俊(哲学)
10:50-11:25	批判の学としての「国文学」	空井伸一(文学)
11:40-12:15	都市計画における批判的な専門知のあり方を考える	植田剛史(社会学)
12:15-12:50	人文諸学のなかのヨーロッパ中世史	小野賢一(歴史学)
13:50-14:25	「多様性」盛衰のうねりと言語問題について	片岡邦好(言語学)
14:25-15:00	「生物学的心理学」が明らかにしてきた「心」の生得的傾向	関義正(心理学)
15:15-16:30	総合討論	



人文知の再生に向けて

伊東 利勝

人文社会に関する学問は、市民社会の成立とこれにともなう社会の流動化により、19世紀に誕生する。社会学、歴史学、心理学、文学、言語学などは、中世の学問体系には存在しなかった。既存の哲学、神学、修辞学（詩学）にしても、近代における自然科学の成立により、その領域は大きく狭められ、新たな意味が付与される。新しい学問は、権威や権力の道具ではなく、市民社会を豊かにするためとされてきた。

主権が市民の手に移り、国民（ネーション）概念が成立するや、地球は国民国家をめざす力のせめぎあいの場となっていく。各国は、互いにその独自性を主張し、内に向かっては統合、外に向かっては国益の守護神と化する。人文知は、そのために生み出され、住民の国民化に寄与してきた。個別市民社会の動向や病理の発見は社会学や心理学が、ナショナル・アイデンティティの構築には、歴史学、文学、言語学が大きな役割を果たすことになる。

この間、学問的営為は、その自由と中立性を金科玉条とし、個性記述につとめてきた。人間社会における「真理」の追究といってもよい。しかしそのことが、自らの立場を不問にし、誕生時に焼き付けられた刻印に思いをめぐらすことはなかった。人文知の存在理由についてあまりにも無自覚であったため、国家や民族の暴走に、何ら歯止めをかけることができず、今にいたっている。

自由、平等、博愛を唱えつつも、これは国境を越えると意に介されない。すべての思想が、国民主義の前にひざまずいているからである。ネーションの身体化は、グローバリゼーションの動きに対し、内向の力に拍車をかけ、社会を引き裂く。民族や人種のために構築された19世紀的学問を超える知とは。いま自分を読み、未来を切り開くための新しい学問の体系が問われている。